

馬車に乗ってブレンナー峠へ

川口 ひろ子

「旅は人の心を豊かにする」と断言するモーツアルトは三十五年の生涯で十年以上を旅に過ごしている。特に幼少期、三回のブレンナー峠を越えてのイタリアへの旅は、音楽家としての彼の歩みに劇的な成果をもたらすことになる。「感動の旅の追体験を、しかも当時の様に馬車で！」という夢が実現したのは二十一年前だ。私たち熱烈モーツアルティアン十八人が参加した。

出発点はインスブルック郊外、ブレンナー峠に向かう道筋にある教会前だ。軽々としたヒズメの音と共に四頭立ての馬車がやって来た。十八人が二回に分かれて乗る。グラッパで乾杯の後ホルンの響きを合図に出発だ。全行程を馬車では社会事情の異なる現代では無理な話で主として貸し切りバスでの移動で、此処から峠の近くの到着地迄約十五分間が私たちの馬車の旅だ。四頭は急勾配の山道を必死で駆け上がる。窓から身を乗り出し大声をあげる人、カメラを高く上げ万歳をしている人、皆興奮している。緩やかな馬の歩みの後ろにはトラックや乗用車が数珠つなぎ、しかしオーストリアの人々に苛立って追い越そうという気配はない。鷹揚な皆さん「物好きな東洋人の趣味」に付き合ってくれているのであろう。

無事到着だ。役目を終えた馬を見て驚いた。四頭とも全身汗ビッシヨリ、湯気が勢いよく立ち昇っている。車体が外されてトラックに収められた後も蒸発は続いていた。「汽」だ。辞書によると蒸気、汽車、汽船、汽笛とある。いずれも交通に関係する言葉で、この時立ち昇っていた「汽」がこれらの原点かもしれない。

私たち一行と重い客車を引いて、アルプスの坂道を駆け登って全身から勢いよく「汽」を吐いて頑張ってくれた愛おしい馬たちに「有難う！」を叫んでバスに乗る。いよいよブレンナー峠を越えてイタリアだ。

馬たちが一斉に噴き上げる「汽」に癒された旅であった。以降二十余年、私の日常は、大変安らかなものに変わっていったように思えるから不思議だ。